

虎明本から虎寛本へ

—— 人称代名詞の改変を中心に ——

土 屋 博 映

1 はじめに

狂言の詞章として名高いのは大蔵流である。大蔵流が長い間狂言の主流として伝統をまもり続けてきたことにより、室町時代の狂言の有り様が推定され、当時の言語研究に関しても多大な資料を与えてくれるのである。中でも虎明本は台本の形式をもつ最古の作品で、寛永十年（一六四二）、大蔵虎明の書写に成る。この虎明本を下ること百五十年の、寛政四年（一七九二）に大蔵虎寛による虎寛本が成立する。この虎寛本は大蔵流の現行狂言とほぼ同じである。大蔵流は狂言の主流として長くその地位を保つわけなのだが、その詞章の定着には少なからぬ時間の経過がある。虎明本と虎寛本は同じ大蔵流ではありながら、その詞章をうかがい見るに歴然とした相違が存在する。虎明本そのものでは何故詞章として不十分だったのであるか、種々の想定がなされようが、大蔵流の地位を維持するためのものとして必然的改変であったらうことは言うまでもない。

本稿はその相違について、視点を人称代名詞（自称・対称）に据え、人称代名詞に如何なる改変が加えられているのかを勘案することにより、狂言詞章の変遷に一解釈を加えてみたい、とするものである。また、その結果により、当時の言語の変遷についても何らかの示唆を与えることができるだろうとも考えている。

さて、本稿は脇狂言における虎明本（注1）と虎寛本（注2）に共通の、しかも内容にあまり差異のない十八曲を選んで研究対象とした。十八曲とは「ゑひす大黒」「連歌毘沙門」「福の神」「大黒連歌」「餅酒」「毘布柿」「鴈かりかね」「つくしのおく」「すゑひろがり」「よろい」「財のつち」「目近籠骨」「三本の柱」「松やに」「せんじ物」「牛馬」「なべやつばち」「たうずまふ」である。「三人夫」も共通の曲であるが、詞章に大なる相違が見られ、比較には不適と考えられるので本稿では除外した。

2 人称代名詞の使用状況

2・1 自称代名詞について

自称代名詞の使用状況をまとめると〈表1〉のようになる。

〈表1〉から気のついた点を列挙してみよう。「是」は名のりを中心に用いられ、虎明本の十一例に対し、虎寛本は十六例である。

「某」は虎明本に五十六例、虎寛本に四十六例で、虎明本の自称代名詞の中ではもっとも用例が多い。

「私」は虎明本で三十例、虎寛本で八十一例で、虎寛本の自称代名詞の中ではもっとも用例が多くなっている。また、「私」は虎明本と虎寛本との用例数の差が最大であり、双方を特徴づける言葉の一つであることが推定される。

「身」は虎明本のみに二例だけである。

「身共」は虎明本に四十九例、虎寛本に三十七例であり、虎明本では「某」とともに代表的な自称代名詞となっている。

「我」は虎明本に五例、虎寛本に八例だが、「われら」は虎明本に八例、虎寛本に二例である。

「こなた」は虎明本のみに四例である。

「こち」は虎明本に一例、虎寛本に二例である。

「おれ」と「ぬし」はともに虎明本のみに一例存在する。

自称代名詞の虎明本の総用例数は百六十八、虎寛本は百九十四で、比率にすると虎明本の四十六弱に対し、虎寛本が五十三強である。こ

〈表1〉 (右の数字は虎明本の、左の数字は虎寛本の用例数である)

自称代名詞		曲名	
是	3	1	1
某	2	2	6
私	9	2	2
身	5		2
身共	10	3	8
我	4	3	7
我ら	8	4	2
こなた	5	1	4
こち	2	1	3
おれ	1		2
ぬし	1		1
計	16	11	11

の割合に対し、甚だしく相違するものは「某」「私」「身共」の三者で

対称代名詞の虎明本の用例総数は百三十五、虎寛本は百七十八で、比率にあらためると虎明本の四十三弱に対し、虎寛本五十六強となる。自称代名詞の比率に近い数値がでた。自称・対称のいずれの代名詞にしても数の上では虎寛本の方がまさる。

さて、この比率に対し、甚だしく相違するものは「こなた」と「そち」で、「そなた」は数値が逆転し、虎明本の方が多くなっている。「汝」も比率的に言えばわずかながら虎寛本が多い。また、「おぬし」「おのれ」「是」「あれ」はいずれも虎明本にしか見られない。

2・3 まとめ

人称代名詞の使用状況について自称代名詞と対称代名詞とにわけて〈表1〉・〈表2〉をもとに概観したが、そこで虎明本と虎寛本では少なからぬ相違があるということが判明した。中でも自称代名詞では「某」「私」「身共」に、対称代名詞では「そなた」「こなた」「そち」「おぬし」に、作品としての個性があると思われるので、次にはそれらを中心に考察をすることにする。

3 人称代名詞の異同状況

人称代名詞の異同状況については、虎明本・虎寛本双方に類似の表現が存在する場合のみとりあげて考察を加えることにする。虎明本・虎寛本のどちらか一方のみ存在するのでは比較対照する意味がないからである。

3・1 自称代名詞の異同状況
 自称代名詞については、「某」「私」「身共」を中心に表にまとめ実際の用例をあげて考えてみる。

〈表3〉（上段虎明本・中段虎寛本・下段用例数）

某	某	身共	某	某	ナシ	某	身	某	私	身共
是	身共	某	私	某	某	私	私	我	我	私
2	2	3	6	17	23	29	2	1	1	1
身共	私	私	ナシ	某	私	身	私	我ら	私	身共
私	ナシ	私	私	我	某	私	私	私	私	身共
7	8	17	46	1	1	2	1	1	1	1
おれ	身共	ナシ	身共	我ら	我	私	私	私	私	身共
身共	身共	身共	ナシ	私	私	身共	身共	身共	身共	身共
1	8	22	30	1	1	1	1	1	1	1

この〈表3〉で、「某」「私」「身共」が他の自称代名詞でおきかえられないものは、「某」^(注3)「ナシ」「ナシ」「ナシ」「某」「某」「私」「私」「身共」の九種である。これらについても考察の意味なしとはもちろんしないが、現時点では積極的にとりくむ段階ではないので、本稿の検討の対象からは一応除外する。ただ、中でも「ナシ」「私」、つまり虎明本にない「私」が虎寛本に存在する例が四十六例なのに対し、「私」「ナシ」というその逆の例が八例であるということは注目に値しよう。数字の上から判断すれば、虎寛本では「私」をより多く使う傾向にあったと言えそうだからである。また、それ以外でも「私」

に關わるものについてみると、「某——私」の六例に対し、「私——某」は一例で、「身共——私」の七例に対し、「私——身共」は一例になっていて、いずれも虎寛本で「私」をより多く使う傾向にあるようである。これらをふまえた上で、一人称代名詞が改変された實際の用例を見ていくことにする。

〈用例〉(上段虎明本・下段虎寛本)

○某——私

1 それがしききへまいらふ 私から参りませう (上143)^(注5)

(上31)^(注4)

(連歌毘沙門 男一↓男二)

2 是は某に下されたほどにやる イヤ私へ被下た御福で御座るに

事はならぬ (上32) 依て、配分致す事は成ませぬ

(上143)

(連歌毘沙門 毘沙門↓男一)

3 あれがかしこまって御さらは、 あれが畏て御さらば、私_レは心得

某は心得ました (上46) まして御ざる (上188)

(餅酒 越前の百姓↓奏者)

4 某がたのふだ人は、うとくな 私_レが頼ふだ者が末広がりを求て

人で御ざるが (上69) 来いと申付ましたに依て (上93)

(すゑひろがり 太郎冠者↓売手)

5 某ねつてしんぜう 私_レが煉つて進ませうが (上156)

(上105)

(松やに 松やに↓主)

6 あそこな者がそれがしがうし あれが私より跡に参て
ろへ参つて (上130) (上159)

(なべやつばち 浅鍋売↓目代)

○身共——某

7 身どもがきげんをなをしに、 太郎くはじゃが某が機げんを直
はやし物をしてくる (上73) と存、囃子物を致す (上98)

(すゑひろがり 果報者↓太郎冠者)

8 そちがしゃうばい人ならば、 そちが羯鼓商売人成らば、某
身共はあきんどじゃ (上129) はあさ鍋うりじゃいやい (上158)

(なべやつばち 浅鍋売↓羯鼓売)

9 身共をたてうよりもお主がた 先へ来た某を退うよりそちのけ
て (上129) (上158)

(なべやつばち 浅鍋売↓羯鼓売)

○某——身共

10 某がいふさへさやうにいふ、 身共が前でさへ其ごとくあらそ
おこせいありやうにして分てや ふ。慥に汝に渡た程に、是へおこ
らふ (上33) せい (上145)

(連歌毘沙門 毘沙門↓男一)

11 某は商売人じゃよ 身共はかつこ商売人じゃいやい
(上128) (上158)

(なべやつばち 羯鼓売↓浅鍋売)

○某——是

12 某はまつやにのせいにて有が 是は松やにの精にて候ふが
(上104) (上155)

13 松やに 松やに・名のり
それがしは日本のすまふ取で 是は日本の相撲取にて候ふが
御ざるが (上134) (上199)

○身——某
(たうずまふ 日本人・名のり)

14 すゑひろがりは身が蔵にはな 某が道具の内に末ひろがり有
いか (上68) か (上91)

15 (すゑひろがり 果報者↓太郎冠者)
身が所へよってござる程に 何れも某が所に寄合て (上154)
(上103)

○私——某
(松やに 客人↓太郎冠者)

16 四百余州に私にかつすまふが 四百余州にも某に勝ものが御座
ござらぬ (上134) らぬと有て (上199)

○某——我
(たうずまふ 日本人・名のり)

17 ゑびす殿と某とは一所にある 三郎殿と我は一所に有るもの成
ものなれば (上28) れば (上150)

(ゑびす大黒 大黒↓男)

○身共——私

18 みどもでおじやる (上31) 私で御ざる (上143)

(連歌毘沙門 男一↓男二)
19 半分はみどもにもたもれ。 さらば私へも配分被成て被下い
(上23) (上143)

(連歌毘沙門 男二↓男一)

20 身共はおく筑紫の百姓で御ざ 私は奥筑紫の御百姓で御ざるが
るが (上62) (上179)

(つくしのおく 奥筑紫の百姓↓丹波の百姓)

21 身どもはいなかの者でござる 私は田舎者で、別に令爾は申さ
が (上69) ぬ (上93)

(すゑひろがり 太郎冠者↓売手)

22 身共をだしぬひて、わきでか 私を出しぬいて求めましたに依
ひまらした (上96) て、ぬかれて御ざる (上164)

(目近籠骨 太郎冠者↓果報者)

23 身共はぬかれませう事は イヤ、私はぬかれは致しませぬ
(上97) (上105)

(目近籠骨 太郎冠者↓果報者)

24 あのかくらうがつつと後にま あのものが私より跡に参て、先
いって、身共へのけと申を へ来た私に、のけと申まする
(上122) (上205)

(牛馬 牛博勞↓目代)

○私——身共

25 是はめでたいかみのかたひな 是はかたい鍋じゃ。是は身共が
べじゃほどに、私のかうかつ物 かうかつ物に致う (上163)
にいたさう (上133)

(なべやつばち 浅鍋売→目代)

○我——私

26 われももたぬく (上33) 私も持ませぬ (上145)

(連歌毘沙門、男一→男二)

○我ら——私

27 我らのうけたまわったは、さ 先私の承て御ざるは、歌を一首
やうでは御さない、二年をおり 宛読ませいとこの御事かと承て
いれて、歌を一首づゝ (上45) (上187)

(餅酒 加賀の百姓→奏者)

○おれ——身共

28 なふくそなたは、のったな 扱そなたの乗た形りは見能い
りがよひがおれがのはまへがと が、身共が乗たなりはまへが遠う
をふてわるひよ (上125) て何とやら見ぐるしうおりやる
(上208)

(牛馬 牛博勞→馬博勞)

以上二十八例があげられた。その内容を考えてみるに、「某——私」
については六例であるが、1では「それがしきさへまいらふ」→私か

ら参りませう」であり、2では「某に……やる事はならぬ」→私へ……
配分致す事は成ませぬ」で、3は「某は心得ました」→私は心得ま
して御ざる」となり、5は「某ねってしんぜう」→私が陳って進しま
せうが」となっている。「某——私」の改変には文そのものに敬意が
こめられ、より丁寧なものに改められているのである。

「私」に関するものでは「身共——私」が七例と多い。18は「みど
もでおじやる」→私で御ざる」であり、19は「みどもにもたもれ」→
私へも配分被成て被下い」となり、20は「身共はおく筑紫の百姓で御
ざるが」→私は奥筑紫の御百姓で御ざるが」で、23では「身共はぬ
かれませう事は」→私はぬかれは致しませぬ」と、24では「身共の
けと申を」→私に、のけと申まする」となっており、これまた敬意の
高い丁寧な表現の中に用いられていると思われる。ただし、「私」に
関する例でも、4・6・21・22のように明確には説明のつけがたいも
のが存在するのは、虎寛本で格別に意識して人称代名詞を改変しよう
としたものではないということなのであろう。

次に、「身共——某」については、7は「身どもがきげんをなをし
に、はやし物をしてくる」→某が機げんを直と存、囃子物を致す」と
丁寧な表現の中に「某」が用いられているのだが、8は「身共はあき
んどじゃ」→某はあさ鍋うりじやいやいと、9は「身共をたてうよ
りもお主がたて」→先へ来た某を退うよりそちのけ」となっており、
敬意・丁寧さというだけでは処理しきれないようである。9では「身
共——某」と「お主——そち」という関係も作用するのかもしれない

い。その反対の「某——身共」については二例である。10は「某がいふさへさやうにいふ——身共が前でさへ其ごとくあらそふ」であり、11は「某は商売人じゃよ——身共はかつこ商売人じゃいやい」となっている。10は敬意・丁寧さという点ではあらたまつた理由を説明できない。また、11は8とまったく逆に使用されているのである。虎寛本では8が「某はあさ鍋うりじゃいやい」で、11が「身共はかつこ商売人じゃいやい」と、同じ場面で同等の人物が「某」と「身共」をそれぞれ用いている。これは「某」と「身共」の差異があまりないということと、それに伴いこの両者を根拠をもっておきかえようという意識はなかったのだということではあるまいか。

「身共」と類似した「身」は虎明本に二例のみであり、虎寛本ではいずれも「某」にあらためられている。これは「こなた」（虎明本4 ↓虎寛本0）「おれ」（虎明本1 ↓虎寛本0）「ぬし」（虎明本1 ↓虎寛本0）などと同様に人称代名詞の整理・統合という点からとらえられるべきものかと思う。

「某——是」は二例で、その逆の「是——某」は見られない。12・13の二例とも名のりの場面であり、虎明本では名のりにも「某」を用いることがあったが、虎寛本では「是」に整理されたものと考えてよい。

「某——我」が一例だけ存在するが、これについては変更の理由は明らかでない。ここまでの考察をふまえれば、虎寛本では「我」でない方が都合がよいのだが、前述のごとく、虎寛本の改変意識は、微に

いり、細をうがつといった徹底したものではなかつたらうことを考えれば、むしろ例外的なものが存在することは当然のことと言えるのだろう。

「某」と「私」のところではほとんど言いつくしたために、「身共」に関わるものは「おれ——身共」の一種だけである。27がそれで、「おれがはまへがとをふてわるひよ——身共が乗たなりはまへが遠うて何とやら見ぐるしうおりやる」と、これも丁寧な表現を心がける中で「おれ」が「身共」へと変えられたということになりそうである。ただし、「おれ」の用例は虎明本に一例のみの存在で、人称代名詞の整理ということも考えられよう。

以上の考察から自称代名詞の改変には二つの場合が想定される。一つは代名詞そのものの改変ではなく、虎寛本では表現に敬意・丁寧さをもたせようとしたことに伴い、必然的におこつた改変である。たとえば「某」から「私」へがそれにあたる。

二つめは——おそらくあまり一般的ではなかつたり古めかしかつたりなどの理由から——狂言の詞章には不適であった代名詞のおきかえである。たとえば虎明本の「身」「こなた」「おれ」「ぬし」などがあげられよう。

虎明本から虎寛本への自称代名詞の変遷は以上のような二点をもとに——徹底的なものではないが——おこつたものだと推定されるのである。

3・2 対称代名詞の異同状況

対称代名詞については、「そなた」「こなた」「おぬし」「そち」を中に表にまとめ実際の用例を考えてみる。

〈表4〉(上段虎明本・中段虎寛本・下段用例数)

そなた	ナシ	22	おぬし	そなた	1	おぬし	和御料	3
ナシ	そなた	10	ナシ	こなた	24	おぬし	そち	2
そなた	そなた	7	こなた	ぬし	6	ナシ	そち	10
和御料	そなた	7	こなた	こなた	5	そち	そち	3
そなた	和御料	3	是	こなた	2	そち	ナシ	2
そなた	こなた	3	おぬし	ナシ	4	汝	そち	1

この〈表4〉で「そなた」「こなた」「おぬし」「そち」が他の対称代名詞でおきかえられないものは「そなた—ナシ」「ナシ—そなた」「そなた—そなた」「ナシ—ナシ」「こなた—こなた」「おぬし—おぬし」「そち—そち」について意味なしとはしないが、本稿の検討の対象からは除外する。ただ、その中で「そなた—ナシ」、つまり虎明本にある「そなた」が虎寛本に存在しないものが二十二例で、その逆の「ナシ—そなた」が十例であるということ、「ナシ—こなた」、つまり虎明本にない「こなた」が虎寛本に存在するというものが二十四例で、その逆の「こなた—ナシ」が六例であるということは注目に値しよう。数字

の上から見ると、「そなた」は虎明本を、「こなた」は虎寛本を特徴づける対称代名詞と言えそうだからである。また「おぬし」が虎寛本では使われないこと、「そち」が虎寛本で多用されることも無視できない事実である。

これらをつまえた上で、自称代名詞が改変された実際の用例について見ていくことにする。

〈用例〉(上段虎明本・下段虎寛本)

○和御料—そなた

29 わごりよがあまりくわくから そなたがくはくらめいた

めくと思ふた (上46) (上189)

(餅酒 越前の百姓↓加賀の百姓)

30 わごりよのいふことく そなたのおしやる通り (上184)

(上64)

(つくしのおく 奥筑紫の百姓↓丹波の百姓)

31 いやわごりよのはこめぼねで そなたへ被仰付たはたしかこ

あった (上91) めく／とやら仰られた (上140)

(目近籠骨 次郎冠者↓太郎冠者)

32 わごりよが案内者じゃ程に、 和御料が御請を申たに依て、

わごりよがよひやうに分別さし そなたが知て居るで有うと存て

め (上91) (上101)

(目近籠骨 太郎冠者↓次郎冠者)

33 わごりよはしつたと見えた程 まづそなたからおりやれ(上177)

に、案内者にゆかしめ (上100)

(三本の柱 次郎・三郎冠者→太郎冠者)

34 いざわごりよももたしめ 今度はそなたに持たさう

(上100)

(上188)

(三本の柱 次郎冠者→次郎・三郎冠者)

35 わごりよ達は、てちだいが有 扱そなた達へは手伝ふて遣た

てもちよかったが、身共一人で が、身共は何として持うぞ

はもたれまひ (上100)

(上118)

(三本の柱 太郎冠者→次郎・三郎冠者)

○そなた——わごりよ

36 そなたはなにと思ふぞ わごりよは何と思ふぞ (上184)

(上64)

(つくしのおく 丹波の百姓→奥筑紫の百姓)

37 中々そなたの事じゃが(上69) いかにもわごりよの事じゃ

(上93)

(すゑひろがり 売手→太郎冠者)

38 それについて、そなたは仕合 すれば和御料は仕合なものじゃ

な人じゃ (上70)

(上93)

(すゑひろがり 売手→太郎冠者)

○そなた——こなた

39 してそなたはどの国の人で御 こなたはまたどれから都へは登

ざるぞ (上55) らせらるゝぞ (上172)

(鷹かりかね 津の百姓→和泉の百姓)

40 さてそなたはどの国の人ぞ 扱こなたはどれから都へは登ら

(上62)

せらるゝぞ (上179)

(つくしのおく 丹波の百姓→奥筑紫の百姓)

41 いやそなたはいかやうな人ぞ こなたはどなたで御ざる

(上128)

(上158)

(なべやつばち 浅鍋売→羯鼓売)

○おぬし——そなた

42 おぬしがながひ名をついたに イヤ、そなたが珍らしい名を付

よつて (上53)

たに依ての事じゃ (上197)

(昆布柿 淡路の百姓→丹波の百姓)

○是——こなた

43 是はいかやうなるおかたで御 ハア、こなたはどなたで御ざる

ざるぞ (上121)

(上204)

(牛馬 牛博勞→馬博勞)

44 是はいかやうなるおかたで御 こなたはどなたで御ざる

ざるぞ (上128)

(上158)

(なべやつばち 浅鍋売→羯鼓売)

○おぬし——和御料

45 おぬしがいふたは (上46) 和御料がくはく／＼らめいた

(上189)

(餅酒 加賀の百姓↓越前の百姓)

46 おぬしがながひ名をついたに 和御料が長い名を付たに依てじ

よって (上53) ヤ (上197)

(昆布柿 淡路の百姓↓丹波の百姓)

47 いや、おぬしはかりがねにげ 和御料はかりがねに元服させた

んぶくさせたか (上56) か (上193)

(鴈かりかね 津の百姓↓和泉の百姓)

○おぬし——そち

48 身共をたてうよりもお主がた 先へ来た某を退うよりそちのけ

て (上129) (上158)

(なべやつばち 浅鍋売↓羯鼓売)

49 おぬしが分でみどもをたつる そちがぶんで目に物を見せたり

事はなるまひ程に (上129) 共ふかしい事は有るまいぞ

(上158)

(なべやつばち 浅鍋売↓羯鼓売)

○汝——そち

50 扱は汝がとふきてあるか すればそちが先へ来たがぢやう

(上130) か (上159)

(なべやつばち 目代↓浅鍋売)

以上二十二例があげられた。その内容について考えてみる。

「和御料——そなた」については七例見られる。30の「わごりよの

いふことく——そなたのおしやる通り」と31の「わごりよのはこめぼ

ねであった——そなたへ被仰付たはたしかこめく——とやら仰られた」

の二例に関しては「そなた」は敬意の高い表現中に用いられている

が、他の例ではそのような事実が明確には見出だせない。その逆の

「そなた——和御料」は三例だが、こちらはまったく敬意・丁寧さと

いう点では差異を見出だせないのである。「そなた——こなた」は三

例で、40の「そなたはこの国の人ぞ——こなたはどれから都へは登

らせらるゝぞ」と41の「そなたはいかやうな人ぞ——こなたはどなた

で御ざる」とは虎寛本の方が敬意のこめられた丁寧な表現であり、そ

こに「こなた」が用いられている。「おぬし——そなた」は42の一例

のみであって、その差は明らかでない。

「そなた」に関してまとめてみれば、「そなた」は「和御料」と、

虎明本・虎寛本ともにおきかえ可能であり、「そなた」の方がやや敬

意のある表現中に使われる傾向があるとは言うものの積極的な差異は

見出だせないのである。また、虎明本の「そなた」は虎寛本で「こな

た」に改変されることがあって、その場合は敬意の高い表現の中に使

用される。これは「そなた」よりも「こなた」^(注)の方に高い敬意が

包含されることを示す、と同時に虎明本の「こなた」が虎寛本で「そ

なた」に改められることがないことを考えると、虎寛本は虎明本より

も敬意を高めた丁寧な表現を心がけたということが言えよう。

「こなた」は虎明本に比し、虎寛本で圧倒的に多くなるということ

は既に述べた。その中で少しかわった例は43と44である。虎明本はこ

の二例で「是」を対称代名詞として使っているのだが、虎寛本ではいずれも「こなた」にあらためてしまっている。これは人称代名詞の整理という観点からもとらえられるべきものであろう。

「おぬし——和御料」は45・46・47の三例で、いずれも表現の敬意についてはかわりなく、虎明本の「おぬし」が虎寛本で「和御料」におきかえられることはあるが、その逆の「和御料——おぬし」は存在しない。これは48・49の「おぬし——そち」に関しても同断。虎明本に「おぬし」は十例見られるが、虎寛本ではそのうち四例が消失し、あと六例はすべて他の対称代名詞におきかえられているのである。「おぬし」は人称代名詞の整理・統合という点で虎寛本では排除されたものと言える。

この整理・統合ということは「そち」についてもあてはまる。48・49の「おぬし——そち」二例、50の「汝——そち」一例を見てもすべて敬意自体には無関係に虎寛本では「そち」にあらためられている。「ナシ——そち」が十例で、その逆の「そち——ナシ」がわずか二例であることを考えると、虎寛本では好んで「そち」を用いたのだらうということが推定される。

以上の考察から対称代名詞の改変には自称代名詞の改変と同様な二つの場合が想定される。

一つは、虎明本に比し、虎寛本ではより敬意を高く、より丁寧さを求めたためにその必然の結果としておこった改変である。たとえば虎明本では「そなた」を多用するのに対し、虎寛本では圧倒的に「こな

た」が多い、というのがそれである。

もう一つは——おそらくあまり一般的ではなかったり、古めかしかったりなどの理由から——狂言の詞章としては不適當と考えられた代名詞のおきかえである。「おぬし」が虎明本のみで虎寛本に存在しないというのは、そういう意識のもとに整理されたからであろう。「是」も同様である。「そち」が虎寛本で好んで使われたことは——今はその理由を明確にはし得ないが——詞章としてより適当な人称代名詞であったからに他ならない。

虎明本から虎寛本への対称代名詞の異同は自称代名詞と同様、以上の二点をもとに、あるいはそれらがからみあいながら、おこったものと思われる。

4 おわりに

虎明本から虎寛本の成立にはおよそ百五十年の歳月の流れがある。大蔵流が狂言界に絶対的な力を持つに至ったとき、その伝統をまもろうという保守的な姿勢に傾いたということは当然なことで、そのための重要な所為の一つに詞章の改変があったろうことはおそらく確かなものと考えられる。その改変の結果人稱代名詞に如何なる異同がおこったのか、本稿で見出されたことを図示すると次のようになる。

〈表5〉に説明を加えると、自称代名詞では、虎明本の「某」「身共」は虎寛本でより敬意のある丁寧な表現を求めたために「私」に改変される傾向が高く、「是」は排除されたわけではないが整理・統合

〈表5〉 〈自称代名詞〉

我 こ な 身 お ぬ	は は は は は	是	某 共 身 私	(虎明本)	(虎寛本)
		(整理)			
		(置換 排除)			

〈対称代名詞〉

お の れ は あ	は は は は は	おぬし	そ な た 和 御 料	(虎明本)	(虎寛本)
		(整理)			
		(置換 排除)	そ ち こ な た		

の一環として名のり、専用に整理され、「我ら」「こなた」「身」「おれ」「ぬし」は詞章に不適格なものとして——整理・統合の一環として——置換・排除された、ということを示す。

対称代名詞では、虎明本の「そなた」「和御料」は、虎寛本で、より敬意のある丁寧な表理を求めたために、「こなた」にあらためられる傾向があり、「おぬし」は排除とまではいかないまでも「そち」にあってかわられ、「おのれ」「是」「あれ」は置換ないし排除されたということを示す。

虎明本を受けた虎寛本では、敬意・丁寧さをより持たせるといふことと、代名詞の整理・統合という二点から人称代名詞に異同がおこったものと推定される。ただし、前者に比べ、後者の用例数は少なく、虎寛本編者の意識は前者の方により強く傾いていたものと思われる。

改変は、無論、人称代名詞にのみ眼をむけられていたのではなく、

表現や内容を総合的にふまえておこなわれたのに相違あるまい。その結果が本稿での結果にたまたまあらわれたのにすぎないのである。編者の主眼は狂言の詞章に敬意と丁寧さ、つまり品格をもたせ、それにより大蔵流の地位の保持までも目論んでいたことは言うまでもないだろう。

〈後記〉 本稿は「狂言集」のほんの一部をとりだして論じたものにすぎないので、「大名狂言」以下を調査すれば、若干の不備な点が出てくるかもしれないことをおことわりしておく。また、対称代名詞の「汝」には時間の関係でふれられず、本稿の主張がやや弱められてしまったことをおわび申し上げます。

- (注1) 『大蔵虎明本 狂言集の研究』(昭和47年 表現社) によった。
- (注2) 『大蔵虎寛本 能狂言』(昭和17年 岩波書店) によった。
- (注3) 「某——ナン」とは虎明本に存在する「某」が虎寛本では存在しないことを示す。以下準ずる。
- (注4) (上31)の「上」は虎明本上巻のことで、「31」は頁数を示す。以下準ずる。
- (注5) (上43)の「上」は虎寛本上巻のことで、「43」は頁数を示す。以下準ずる。
- (注6) 「連歌毘沙門」は曲名、「男一」「男二」の「男一」は話し手、「男二」は聞き手である。以下準ずる。
- (注7) 山崎久之氏は「国語の待遇表現体系とその歴史」(『国語学』第21集)で、虎明本に見られる待遇表現体系を、対称代名詞と述語との対応関係により、敬意の高いものから順に「こなた段階」「そなた段階」「わごりょ段階」「汝段階」「おのれ段階」の五段階としてとらえている。